

奈良時代の宰相であり、近江の国司でもあった藤原武智麻呂は、その伝記の中で近江国を次のように語っています。「近江国は宇宙に名ある地なり。地は広く人は衆くして、国は富み家は給わる。東は不破に交わり、北は鶴鹿(敦賀)に接し、南は山背(山城)に通じ、この京邑に至る。水海は清くして広く、山木は繁くして長し。その壤は黒墟にして、その田は上の上なり。水旱の災いあるといえども、かつて穫れぬ恤無し。」近江の特徴を誠に良く表した文章だと思えます。

の回りに田畑が広がり、緑なす山々がこれを取り囲んでいます。そして、近江に降り注いだ雨のほとんどは琵琶湖に集まります。近江は、決して広い国ではありませんが、「水」の誕生から終着までがひとつの国の中で完結する「水の小宇宙」とも言つべき国です。そして、近江の先人たちは琵琶湖が生み出したさまざまな恵みを受け取り、「琵琶湖文化」とも言うべき、個性的であり力強い文化を培ってきました。その恵みの一端を紹介しましょう。

「水の小宇宙」



「飯とともに漬け込まれるフナズシ」

豊かな水に恵まれた山は、山林資源の宝庫でもありました。近江の山から切り出された木材は川を流れ、琵琶湖に至り、さらに都や社寺の造営のために瀬田川を下っていきましました。山林に生きる動物もまた、大切な資源として利用されてきました。

山裾に広がる平地は地味豊かで、水も得やすく、農業に適した土地です。豊臣秀吉が行った大開検地での近江一国の石高は約78万石とされています。この石高は畿内五万国の総石高141万石と比較しても遜色ありません。しかも近江国土の6分の1を琵琶湖が占めているのです。いかに生

産力の高い土地であるかがわかります。

そして琵琶湖。琵琶湖には54種類もの魚たちが生息し、湖国の人たちは多種多様な漁法を駆使して魚を獲り、暮らしていました。その歴史は1万年にも及びます。この豊かな水産資源をもとに近江の人たちは、フナズシをはじめとする独特の食文化を育ててきました。また、琵琶湖の魚は、都の人々を支えるタンパク質の供給源として重要な役割も持っていました。このほか、琵琶湖に育つヨシも屋根材や家具などに使われましたし、近年では邪魔もの扱いされている琵琶湖の水草も、田畑の肥料として争って刈り取られた時代がありました。そして言うまでもなく、琵琶湖の水自体が私たちの命を支える恵みです。

まさに、近江を支え、見守り続けるマザーレイク、それが琵琶湖です。

近江支えるマザーレイク

(財団法人滋賀県文化財保護協会 大沼芳幸)